

第 2 回地域景観ワークショップ in 光
「景観とまちづくり」

山口県景観アドバイザー 瀬口 哲義



平成18年7月23日(日)
光市室積公民館

貴族的な意識を持って、良好な景観を目指す

私が『まちづくり』に関わり合うようになったのは、市内の青年団体に参加するようになってからです。もう15年も前の話になります。

当時、既に“広域でまちづくりをしていこう”ということが話題になっていました。平成の合併を見据えた県の施策で、県内では徳山、周南地区が早くから準備をしていました。

私たちのところでも、そういう状況を踏まえて、県内、県外からいろいろな方を招いて、お話を聞きました。

その当時は、「景観」という言葉は、そんなに出てこなかったように思います。

“住み良い、便利なまちづくり”ということだったのでしょうか。もちろん、美しいまちを目指していたことも確かですし、“住み良い、心地よいまちづくり”について考えていたことは、当然、現在の「景観」につながるころでもあります。

その中でお招きした講師の先生で印象に残っているのが、磯村英一先生のお話です。磯村先生は都市社会学の研究者ということで、たくさんの著書もありご存じの方もいらっしゃると思います。当時の具体的なお話の内容はほとんど忘れていますが、いまでも印象に残っていることを一つお話しします。

それは、磯村先生が終戦後に渋谷区長をされていたときの話で、「占領軍の司令官から区役所を明け渡せと言われたときに、この建物は「シティーホール」だと答えたことで、占領、接收から免れた」ということです。

市民という言葉が辞書で調べてみると

しみん【市民】

- 1 市の住民。また、都市の住民。
- 2 《citizen》近代社会を構成する自立的個人で、政治参加の主体となる者。公民。
- 3 《(フランス)bourgeois》ブルジョア。

というふうにてできます。

私たちは、市民というところで生まれれば自然に市民になっているということで、欧米のように市民権を勝ち取ったという意識は低いのではないかと思います。

フランス革命の背景

18世紀のヨーロッパ各国では、啓蒙思想が広まって新しい社会の息吹が聞こえていた。

「責任内閣制」を成立させ産業革命が起こりつつあったイギリス、自由平等を掲げ独立を達成したアメリカ合衆国は、他国に先駆けて近代国家への道を歩んでいた。

しかし、フランスでは18世紀後半に至っても、ブルボン王朝による絶対君主制の支配（アンシャン・レジーム）が続いていた。

アンシャン・レジーム下では、国民は三つの身分に分けられており、第一身分である聖職者が14万人、第二身分である貴族が40万人、第三身分である平民が2600万人いた。

第一身分と第二身分には年金支給と免税特権が認められていた。一方でアンシャン・レジームに対する批判も、ヴォルテールやルソーといった啓蒙思想家を中心に高まっていた。自由と平等を謳うアメリカ独立宣言もアンシャン・レジーム批判に大きな影響を与えた。

フランス革命の後、貴族が平民になったのでしょうか、それとも、平民が貴族になったのでしょうか？

身分のことをいうと人権の配慮からいろいろ問題ですが、私は、平民が貴族になったという風に思っています。

現実に、私たちはオペラを観劇することも、カリブに旅行することもできます。生活レベルは物質的には当時の貴族をしのぐ生活をしているのではないのでしょうか。スーパーに行けば全国の食材が手に入り、アイスクリームも食べることができます。御者はいないけど、自分で運転してどこにでも行けます。

江戸時代、明治の改革、戦後の占領軍から教えられた民主主義、という歴史の流れの中で日本人の市民、住民の意識はどうなのでしょう。

景観法の基本理念の中に

良好な景観は、観光その他の地域間の交流の促進に大きな役割を担うものであることにかんがみ、地域の活性化に資するよう、地方公共団体、事業者及び住民により、その形成に向けて一体的な取組がなされなければならない。

とあります。

法の中では住民という言葉が使われていますが、この住民というのはまさに、市民「citizen」でなければならないと思います。

景観について、法の強制力をもって、取り締まっていくという方法が手っ取り早いのかもしれませんが、それでは法の目的である、

美しく風格のある国土の形成、潤いのある豊かな生活環境の創造及び個性的で活力ある地域社会の実現を図り、もって国民生活の向上並びに国民経済及び地域社会の健全な発展に寄与することを目的とする。

ということにはなりません。それでは法で縛られた監獄のようなまちになるのではないのでしょうか。

世界遺産で紹介されている、“アヴィニオン歴史地区”、“フィレンツェ歴史地区”などは、時の権力者の意向が強く反映されたものであると思われませんが、その後、市民権を獲得した市民により、現在まで、市民「citizen」意識と、(もう一つの市民の意味である)ブルジョア的意識でもって受け継がれてきているのではないのでしょうか。

現在、“良好な景観”を目指すということは、「市民」、つまり、フランスで言う“貴族的な意識を持つ”とすることです。貴族だった人に聞いたわけではありませんが、どこかで「貴族も疲れる、体裁良くしておかないといけないから」なんてこと言っていたような気がしませんか？

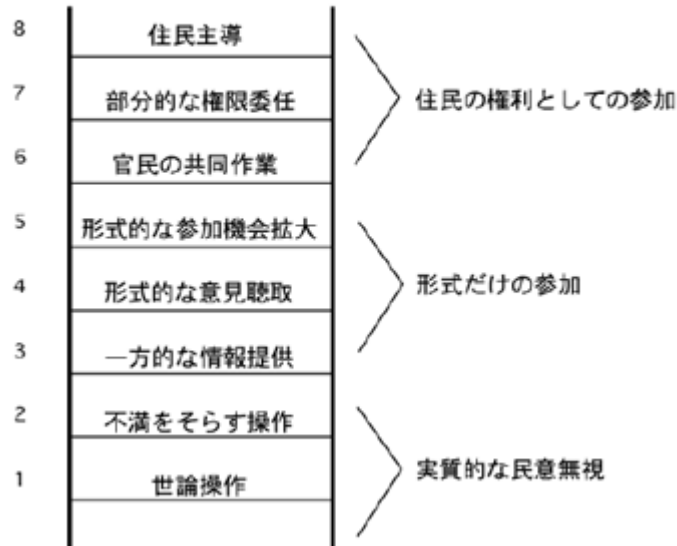
金にあかせてとは行きませんが、「気持ちだけでも貴族」。そんなふうを考えるのもいいのではないかと思います。

市民意識の大切さ

住民参加の概念については、米国の社会学者のシェリー・アーンスタインが「参加の梯子」という表現で分かりやすく説明しています。

八段から成る梯子の最下段は、「世論操作」の段階と位置付けられています。「住民参加」の名を借りた権力者による支配・統制の状態を示しています。その一段上の「セラピー（住民の不満をそらす操作）」とともに、実質的には参加不在の状態を意味しています。

住民参加の梯子 (A Ladder of Citizen Participation)



出展) Arnstein, Sherry R. "A Ladder of Citizen Participation," JAIP, Vol. 35, No. 4, July 1969, pp. <http://research.mki.co.jp/eco/proposal/participation.htm>

“まちづくり”における住民参加は、日本においても昔からされてきたことと思います。神社を中心にした村祭りや、商店街、道普請、共同で茅葺き建物の補修、伝統的な行事は住民の手で受け継がれてきました。

しかしながら、都市化するにつれ、そのようなコミュニティーが失われ、まちづくりは、“例えば建築において、建築基準法の最低限をまもれば、なんでもあり”という風潮になってきました。

美しいはずの地域の景観が壊されてきていることを考えれば、“景観法に基づく景観計画の策定”という法的根拠に基づく規制の前提として、住民、市民意識が大切になります。

「好き」ということから始めよう

次に、その市民がまちづくりに対してどのように取り組むかと言うことですが、“都市、まちは生きている”といます。個々の建築、道路など構造物、山河の自然は、石ころ、岩とかあるいみ無機質ですが、まちは、それが有機的に組み合わせられ息づいています。

景観法にある良好な景観とは、健康な体、美しい体ということではないでしょうか。

いろいろなまちがあるように、ひとくちに“健康な体”、“美しい体”といっても人それぞれで、ボディービルで鍛えた筋肉マン、サッカーをするちょっと足は短いが安定感のある私のような体、それなりに自分の体好きなのです。肌の色の違いや、髪の毛の形、服装も装飾品も含めていいのかもしれない、いろいろな美しさがあります。からだはいろいろなパーツ、皮膚や臓器、骨格、そしてその中を走り回る血液やリンパ、はたまた栄養となる食物で構成されます。食物は体の中を通過していく、まちで言うなら観光客みたいなものかもしれません。これら体を構成する細胞は、どれも同じDNAをもっているから、

それらが一つの体として機能しているのだと思っています。

サッカーをするこの私の体が好きと言いましたが、みなさんはどうでしょうか。日本人特有の謙虚な姿勢で、あまり人前では自分のことそのように好きだとか言わないかもしれませんが、まず好きになってもいいのじゃないでしょうか。食べるのが精一杯でそんなこと、かまってられないとかいう人もいるかもしれません。うちの嫁は化粧品ばかりに金かけてとかいう場合もあります。

まちのよそおい、良好な景観についても同じことがいえます。

市の財政が苦しいから、化粧なんてできないとか。でもやり方次第で人のことを例にしていきますがそれなりに美しさを保つことはできると思います。

私が自分の体を好きといったようにみなさんがまちを好きかどうかで、この「良好な景観」作りも変わってきます。

少なくとも無条件に「好き」ということから初めて、「そうですね私も最近お腹でてきていますので、少し引っ込めよう。」とか、「気づいたら無精ひげですが、ちょっとはさみを入れたり」とかします。

愛国心とか郷土愛とかいろいろ言われますが、「ワールドカップで決勝トーナメントにいけなかったけど、日本って好きよね。」「やっぱ山口県いいところだ。」っていう人をひとりでも増やすことです。

現実には都市は病んでいるということかもしれませんが、好きということからはじめてほしいと思います。

ワークショップは、まちのDNAを探す方法

体を例にとって話していましたが、まちについてもいろいろな機能をする建物、構造物、自然というものが組み合わされてできあがっています。

光市は「おっぴ都市宣言」ということで、きれいな「おっぴ」をもった女性のイメージかもしれませんね。

からだに障害が起きたとき、自然と直す力も備えてはいますが、外科的な治療や、薬を必要とすることがあります。ガンといわれるDNAを破壊するようなことが、まちでもあります。また体には拒絶反応というものがあって、異物に対して受け入れを拒むことがあります。免疫ということで起こるとされていますが、“まちの免疫”は、市民の一人一人の中に持っていると同時に、景観法ということがその免疫の一つになるのではないかと思います。

DNAの違いは現代の科学の力で解明されて来ていますが、“まちのDNA”を解き明かすことはどうでしょうか。

「そんなものあるのか」ということから始めなくてはなりませんが、私は、市民として生活しているそのまちには、必ず体と同じように共通するDNAが存在すると思っています。

既に、市民にこのDNAが染み着いているところは、景観のお手本になるような「良好な景観」を保っているのではないのでしょうか。

多くの人々が共有できるDNAを持ったまちは、それなりの個性を発揮していると思います。また、強烈な個性はなくても、平凡な人、体として健康で美しく生きて来ている人もるように、ありきたりのまちといってもその奥にはちゃんと共通のDNAがあるものと思っています。

そのようなまちのDNAを探す、確認する一つの方法として、地域景観ワークショップも企画されていると思います。

分かり合える関係を作っていくことが大切

ワークショップは識字教育に使われる手法で、お互い言葉のわからないものが、理解をしていくということです。現在はあらゆる地域の言語が辞書にされて、言葉をこえて理解し合えるということですが、「良好な景観」って地域、人によってその捉え方は様々です。

ワークショップになじみのない方はこれまで受けた教育というのと違い違和感があるかもしれません。学校では知識として言葉を教えてもらうという一方的な関係ですが、ワークショップでは言葉のない世界で、喜怒哀楽、感情を共有する、お互いを理解するというところに主眼がおかれます。そこで作られた言葉が共通の理解となり、例えば「良好な景観」の共通のDNAということになると思います。

ワークショップについて、共同作業によって知恵、工夫を出し合い、成果を創造するという風にあります。先に述べたように識字ということから考えて、例えば、英語と日本語のどちらを知っているかで上下が決まるものでも、英語を知っていることが知恵でもありません。結果として“英語と日本語が両方分かる”、“両方の人にわかる”ということが大事なことです。

ここで言えば「景観」という言葉を、お互いに理解するということになります。

同じ言葉を話す人が集まっているのだから、そんなこと言われなくても「景観」といえば誰もがわかっているといえるのでしょうか？

言語はちがっていても、「良好な景観」を分かり合えるように、同じ言語を持っているもの同士、分かり合えないこともあるし、それがその人の立場、行政、住民、事業者などではどうでしょうか。住民同士でも言葉の意味を分かり合える関係を作っていくこと、そんなことがこの景観、まちづくりに必要なことと思います。